

中学生の広汎性発達障害児に対する感情と行動

- 大学生による中学生時代の回想から -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
吉永 彬子

本研究の目的は、広汎性発達障害児とその同級生がより良い仲間関係を構築するために必要な支援や介入方法を考える手がかりを得るために、その仲間関係の現状を把握することである。そこで、広汎性発達障害の疑われる児童・生徒と同じクラスになった際に、同級生はどのような特徴を把握するのか(以下、知識と記載)、またどのように感じるのか(以下、感情(印象)と記載)、そしてどのように振る舞うのか(以下、行動と記載)を調査し、さらに、広汎性発達障害の疑われる児童・生徒との接触経験、知識、感情(印象)、行動の間には、どのような関係性があるのかを分析した。

研究協力者(学生)のうち、回答に欠損値が無く、かつ本研究の目的に合致していると判断した学生138名(男性64名、女性74名)のデータを分析対象とした。調査は質問紙法で行い、回答者には中学生時代の友人関係を回想してもらった。

その結果、接触経験は3群(無群、少群、多群)に分類できた。知識に関しては、目立つ問題行動、自己の関与度の高い行動、相互作用の少ない行動の順で認識されやすい傾向があった。感情(印象)は「個人的評価」因子、「自己統制」因子、「活動性」因子、「敏感さ」因子から成っていることが示された。行動は、対等・友好的行動をとると回答した人が最も多く、傍観、回避・防衛がそれに続いた。接触経験を3群(無群、少群、多群)に分類した上で、接触経験と知識の関係について調べたところ、知識は接触経験無群より接触経験多群の方が有意に多かった。感情(印象)や行動と接触経験・知識の関連を調べるために接触経験×知識の二要因分散分析を行ったところ、感情(印象)のうち、「個人的評価」「自己統制」「活動性」は接触経験と知識の影響を受けることが示唆された。さらに、感情(印象)と行動の関係を調べたところ、行動は感情(印象)のうち「個人的評価」と「活動性」の影響を受ける可能性が示された。

以上のような結果から、接触経験や知識は感情に影響し、感情は行動に影響している可能性が考えられた。しかしながら、本研究においてはより良い仲間関係の構築のために有効、かつ現実的な方法の方向性を探ることはできなかった。より好意的・積極的な行動を生み出す要因は何なのか、また、どのような経路を辿って実際の行動に結びつくのかに関して、さらなる研究が必要である。